

---

# 今、そこにある不死

刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今、そこにある不死

### 【Nコード】

N6232T

### 【作者名】

刹那

### 【あらすじ】

この世には不死の人間がいる。本に埋もれた陰気くさい部屋の中で語られるのは不死身の人間の定義。その真相とは……。

ノ・ライ・フ  
不死。

死の定義とは何か。それを決めるには、生を定義する必要がある。生命活動をおこなっているものを、人は生きていと呼ぶ。生物であれ、植物であれ、だ。

生の反対は、死である。万物にひとしく訪れる絶対的な暗黒を人は死として恐れた。不死とは人が知恵を獲得したときから渴望してやまないものであった。

しかし、闇がなければ光は存在しないように、死がなければ生はあり得ない。不死は人が未知の恐怖から逃れるために生み出した幻想なのだ。

なのに、それは間違いなく不死だった。

死ぬことはない。何故なら、それに死ぬなどという概念が存在していなかったのだから、死ぬことはけしてない。

ノ・ライ・フ  
不死。

よって死はなく、同時に真の意味で生きてはいなかった。

——おれがその話を聞かされた時、真っ先に洩らしたのは渴いた笑いだった。深夜のテレビ番組で売れない芸人のコントを見たときと同じ、冷めた笑みだ。

1LDKのマンションの一室で、おれは来客者に出すとは思えないほどにクッションが硬くなった座布団に尻を埋めていて、どんな材質なのかわからない、ぱっと見は黒檀に見える机に肘をついている。

ひとり暮らしなら充分だが、1LDKのリビングはふたりもいれば少々の窮屈さを感じさせる。なにもそれは部屋の広さだけに問題があるわけではないのだが、それにしたってこれで家賃はおれのバ

イト代二ヶ月分である。駅前だからといって、大家は人の足下を見過ぎだ。もっとも、家主はおれではなく、もうひとりの少女の方だ。「くだらない話じゃないか」

鬱屈と腹の底に堪った感想を二酸化炭素と一緒にはき出す。自分が忌避する、もっと率直に言えば嫌っている類の話に付き合わされてしまったせいで、酷い倦怠感に悩まされていた。その恨みを込めて、おれは顎を持ち上げ向かいの壁沿いに置かれたベッドに腰掛ける少女の目を見返した。

「本当に、くだらない話だよ、まったく」

一升瓶一杯くらいの恨めしさを込めて念を押したが、少女は黒髪を揺らしながら微笑む。おれの害意は少女の喉を鳴らせる程度の効果しか発揮することはなかった。

彼女は、日中は外出をしない。今も外の日向に反逆するように部屋のカーテンを閉め切っているために、肌は病的に白く、シミもニキビを見あたらない。そのくせ、笑みの形で持ち上げた唇だけは血のように赤々としていて、おれはホラー映画を鑑賞している心地になる。無論、彼女の役柄は幽霊役だ。街の中を血管のように流れていく人と比べれば、明かにずれている。そうだ、この肌の白さが、彼女の体内に血が通っているのかと疑わせるのだ。

「なにも二度はいうことはないじゃない」

「なら言わせてもらうが、わざわざ人を家に呼びつけておいて開口一番に語る話か、それは。昼間からこんな古本の臭い漂う辛気くさい部屋で話されたら気が滅入るだろ、常識的に考えればわかりそうなものなだけだな」彼女は古本の収集癖があり、もうひとつの部屋から溢れてリビングも圧迫していた。

「その常識というものの方が、わたしにとってはよほど不可解なものに思えるよ。いったい、どこの誰が決めた法律なのかな。もし常識が人類を平均化した結果の趣味嗜好から導き出した倫理なら、そんな人間は存在しないのだから、常識なんて意味がないとしか言いようがないじゃない」

「言い方を変えよう。おれが不愉快なんだよ」

おれとこの少女の付き合いは、気付けばもう三年になる。それほど関わりあっていれば、いい加減に相手のこともわかってくるものだ。こういう婉曲的な、捻くれた——ある意味、誠実なのだろうが——な言い回しをするのも、単に相手を煙に巻きたいから出てくるものである。

自身の思想も影響しているのだろうが、彼女の口にする言葉のほとんどは相手の反応を楽しむため、即座に導き出すものだからどこまで本気か考えるだけ無駄である。こういう手合いを相手にするときには、無意識に口頭にあがってしまう「常識的」だとか「人間として」なんて意見を誇大にして補強しようとするくだらない定型句を排除するのがもっとも効果的なのだと、おれは三年間で学んでいた。「なにが、不死、だ。死なんて言葉をわざわざ使うんだから、対象は生物なんだろう。なら、不死なんて存在しない。車に轢かれてアスファルトの汚れになったような人間が生きてて堪るか」

「誰も車に轢かれた人だとか、そんなことは言っていないんだけどね。例えば話は未知の物事を理解するには簡単ですぐ頼ってしまいがちだけどね、それは本来伝えるべき事実からは逸脱していることを理解しておくべきだよ」

「やかましい。お前だっておれとたいして人生経験は変わらないんだ、説教は垂れるもんじゃない」

「年齢で人の能力が決まるわけではないよ、年功序列は忌むべき制度ね」

「だが、年齢は指針になる」おれは即答した。「年齢で物事見なっている奴はな、いつだって自分が他の奴よりも有能だと思ったりするんだよ。実際に有能ならそれ相応の扱いってものを受けるもんだ。それがされないのは周りが悪いんじゃない、自分に問題があるんだ。外に文句を言うくらいなら、たまには自分の裡を見て批評でもしてみたらどうだ？」

「その言い分も間違っていない。うんうん、そうだね、無能ほど権利

を主張するものだよ。でも、それは盛大な自虐だね。少なくとも、わたしはきみよりも優れている」少女は床を指さした。「証拠は、ここ」

おれの給料の倍を毎月支払わなければいけない部屋をあげて、彼女は余裕の笑みを浮かべる。同じ学生でありながら、おれと彼女には経済力の差があることには疑いの余地もない。

だけでも、世間と比べてみれば、どうってことはない。彼女も井の中の蛙だ。この部屋よりも高い家賃を毎月支払い、それでも尚豪遊できるほどの資金を社会の人間は稼ぐことができています。おれよりは少女が優れているとしても、全体からすればその程度なのだ。「この部屋におれが劣るのは認めるがな。だが、それだけだろう。たかが貧乏学生ひとりに勝ったってなんの自慢にもならんぞ」

「あれ、言ってなかったっけ。このマンションはわたしのものなんだけどね」

得意げになっていたおれの表情が引きつった。……なんだって？間違いないと自信一杯で提出したテストが不正解だらけで返ってきた羞恥が胸の裡でわき上がり、おれは微笑む少女の顔を見ていられなくなって目を逸らした。酷い敗北感だ。

「それで話を戻すけど、わたしがきみを呼んだのは他でもない。わたしが実際に見た謎を解いて欲しいのさ。この世に存在する不死の謎をね。勿論、さっききみが言ったように、それは生物だよ」

「馬鹿げている……」

心底そう思った。これは謎解きなんてもんではない。ただのなぞなぞであり、クイズであり、ただの俗世にありふれた娯楽となんら変わるものではなかった。

食べられないパンはなに、というなぞなぞがある。パンは麦から作られた食物であり、食べることを目的とされて製造されたものだから、食べられないなんてことはあってはいけない。

酸っぱい本はなにか、といわれても、本は食べるものではないし口に含んだこともないから答えようがない。

で、あるが、食べられないパンはフライパン、酸っぱい本は酔いり——推理小説、と、この両者にはおよそ考えられない回答が用意されている。つまり、これもそういう手合いのものだ。

このことからおれが考えついたものは、ひとつ。

「つまり、最初から産まれていない者だ。母体に受精するよりも前、この世にまったく形を成していない状態なら、それは不死身だろう。なにせ、生きてないんだから死ぬわけがない」

この世に存在しない者は、稀代の殺人者だろうが大量殺戮兵器だろうが殺すことはできない。あらゆる外敵要因に干渉されないのだから、それはまさしく不死と呼ぶに相応しい。

ここまで言い切ると、彼女はクスクスと笑った。口元に手を当てた、押し殺そうとしても漏れ出してしまった笑み。その仕草は誠に遺憾ながら普段とはかけ離れたかわいらしさがあつたのだが、おれは笑みの理由がわからずに動揺した。この様子はどう見ても正答を讃える類のものには見えない。

「残念、外れ。惜しかったよ。でも、わたしは最初に実在しているっていったじゃないか。生きていない生命っていうのはいるかもしれないけど、それはオカルト的な思想の中の話でしょ？ わたしはね、確かに見たの。——不死の使徒を」

彼女はベッドに横たわり、軀をおれの方へと向けた。白いふかふかとした枕に顔を半分まで埋めて、遠くを見るように目を細めた。

「この間、山に出かけたんだ。ハイキングのつもりでね」

いきなり言葉の場面が飛んだものだから、おれは一瞬だけ混乱した。理解はすぐに及んだものの、おれの脳内が少しの間混線したことを彼女はお見通しだった。おれが話題について来たのを確認してから、彼女は話を再開した。

「鬱蒼と茂った木々の間を縫って、奥へ奥へと進んでいくとね、わたしは蠅と蠅の群れの中で見つけたの」おれの反応を窺うために、彼女はわざわざ一拍おいてから言った。「人の死体を」

瞬間、怖気が走った。蠅にたかられるほどに腐敗した死体を前に

したにもかかわらず、まったく動じていない彼女を易々と想像できたからだ。

人の死体の話を一切の感慨もなく会話にあげられる者というのは、いる。その死人になんらかの思い入れがなければ、それはひとつの死体という単位でしかない。そこに感情はなく、ただのモノと大差ないのだ。マネキンが壊れていたからといって、不気味以上の感想を抱く者はいないのと同じだ。

でも、彼女のこれはそういう数字的割り切りによって成されたものではなかった。完全な天性の感性によって、彼女は死体に嫌悪感すら抱かなかったのである。あとになってから冷静な思考を働かせることができるものはいるだろうが、陰惨な有様の死体を目の当たりにして、息を飲まない人がどれほどいるというのか。

恐怖の波——それは、あつという間におれの中から引いていく。そんなこと、わかっていたことだ。この少女は元来こういう人間である。別に、他人の死に心を痛めるなんて優しい感情の揺れを期待していたわけではない。彼女は冷酷と呼ばれてしまうような人種であろうが、見てきた異常行為をおれに働くようなことはない。だから怖くはあったが、恐れはなかった。

「その死体は女性でね、妊婦だったよ。その彼女がわたしに不死を提示してくれたんだ」

彼女は自分の服の裾をまくって、露出した下腹部を指先で撫でる。おへその下を滑る指先から、気恥ずかしさで目を逸らしてしまいそうになったが、今更なので意識しないことにした。

「ここからね、こう、出てたんだよ。赤ちゃんが。へその緒も繋がったままだった。きっと、母親が死んだあとに産まれたんだろうね。その赤ちゃんはまだ名前もなかったんじゃないかな。少なくとも、社会的な呼び名はね」

悪魔めいた彼女の囁き。——ああそうか、とおれは納得した。

それは、間違いなく不死だ。誰にも殺めることはできない。

おれが理解したことを、彼女はわかっているようだった。だから、



おれもわざわざ口に出すことはしなかった。代わりに、山奥の生命に思いを馳せる。

どんな理由があったのかは知らないが、出産寸前だった女性が山奥で死亡した。あるいは、意識はないが母には意識があったのかも知らない。そのとき、赤ん坊は産まれたのである。母の血流をへその緒から送り込まれながら山中に産み落とされた赤ん坊は、泣いた。ひとり、大声で産声あげたのだ。

赤ん坊には意志はない。正確に言えば、人間的な知恵はない。だけれど産まれる前から本能に刻み込まれていた、誰かに見つけて欲しいという産声は、だからこそ赤ん坊から発せられる。でも、その赤ん坊を抱き上げる腕はついに最後まで現れることはなかった。

死んでしまった赤ん坊は、やはり死者だ。でも、それは観測されるまでの話である。少女に見つけられるまで、確かに赤ん坊は不死だった。

だって、赤ん坊は誰にも知られていない。誰も赤ん坊が生きていることを知らない。名前もないのだから、社会の一員として認められてもいないし、この世界の記憶にも記録にも産まれてからの存在は認められていない。それは、いないのと同義だ。生きていないものは殺せない。

シュレディンガーの猫という有名な量子力学の思考実験がある。猫を箱にいれ、五〇%の確率で毒ガスが散布され猫が死ぬようにセットする。しかし、外からは猫がどうなったかわからない。箱を開けるまで、猫は生きている可能性と死んでいる可能性が同時に存在する、というものである。

赤ん坊は自然の中で奇しくもシュレディンガーの猫と同じ状態になってしまったのだ。

我思う、故に我有り。そんな簡単に自己を確率できたら、どれだけよかったか。それ以前に、赤ん坊には自身の存在を確信するという自我そのものがまだ育っていないのだから、自分で存在を確固たるものにせよなど無理難題もいいところである。

人は、人に認識されることでしか生存できない。

故に、不死。この世にあって不死身であった者の正体。

その話を聞き終わって、おれはぼつりと言葉を洩らす。

「ノー、ライフ……命はない、か」

不死をノーライフと呼称することに皮肉を感じて、おれは溜息をついた。本当に、頭が痛い話だった。おれも不親切な人間を自認しているのに、なんとも、気分は沈んでいた。心地よいとは言えない話をしたことに対しての苦言を、彼女に訴える元氣すらなかった。

「降参だよ。こりゃ、わからなかった」

「これはわたしの自信作とも言える問題だったからね、解けないのも当然かな。そう気にすることもないよ。問題が難しかったただだからね」

枕を抱きしめて、子供っぽい自慢の仕方をする少女に怒る気にもなれず、むしろそんな態度に愛らしさすら抱いてしまいがちながらも、おれは脳裏に浮かんでいたことを口にする。

「でも、お前に見つけられた時、その赤ん坊は死んだわけだろう？」

少女に観測されたことで、赤ん坊は死で固定された。

おれが言っているのはへりくつのようなもので、他人が聞けば、手を下したわけではないのだから、その前から死んでいただろう。

……なんて、常識的な答えが返ってくるのだろうか。

「そうだよ。まさか、わたしが殺したとでもいいたいのかな？」

「言わないって」

そう、ただ。

「それは救いになったのかもしれないと思ったただけだ」

「どういうこと？」

「だってさ、不死なんて辛いだけだろ。ずっと寒い山中でひとりきりだ。なら、死んでしまった方がいい。それは、いくらかの救いになったんじゃないか……そう思ったんだよ」

我ながら、おこがましいにも程がある理論だった。量子力学の論理を使った不死の定義の成立させたのがその赤ん坊だが、そうやっ

ておれたちが言い合っているのは単なるお遊びだ。謎解きゲームなんていうお遊びの題材にされ、さらには勝手に救われたことにされている。産まれてから誰かに触れることもできずに死んでしまった苦痛はどれほどのものであったか。人の痛みが理解できるとは思っていないけど、こんな自己満足で侵されて良いものではないはずだ。それでも、赤ん坊は少女に見つけられるまでは、誰にも自分の存在を知覚されていなかった。それは、どれほどおそろしいことだろうか。おれはあらゆる人の記憶に自分がいないことを想像する。身震いがした。群れるのが嫌いで、個人主義者なおれですら、それはおそろしいと思う。だって、誰にも知られてないってことは自分が生きているって証明すらあやふやになってしまう。

だから、赤ん坊は誰かに自分のことを知ってもらえて、それは救いになったのではないか——その希望に縋り付いてしまった。

なんて、都合の良い詭弁。

我ながら呆れるような論理で、おれは三年の付き合いから少女が次にとる行動に当たりをつけてしまった。大笑いだ。

……そう思っていただけに、少女がずっと黙っていたことに驚いた。

不思議に思って彼女の顔を見ると、ようやく少女は喉を震わせた。

「そうか、救いになったんだ」

邪気のない笑みが、そこにあった。今まで常に見えて隠れしていた毒気が、このときはまったく見受けられなかった。おれはしばらく、その顔に見とれていた。年相応の、相好を崩した様子は、控えめに見てもとても可愛かった。こんなものを見ては、すぐにでも槍の雨が降って富士山が噴火してもおかしくはないと思えた。

「……なんだよ、ふつうにかわいいところがあるじゃないか」

「ん、なにか言った？」

「気にするな。独り言だ」

おれは今日初めて、弾んだ気持ちで頬を緩めた。

——余談。

「ああ、そうそう。あのあとわたしが調べてみたら、彼女は旦那さんに殺されたんだって。私情のもつれで不死者を作り出す状況を生み出すなんて、人間ってホントに面白いよね」

「前言撤回……お前はまったくかわいくねえ」

それに死体は放置かよ。

## （後書き）

高校生の頃に二時間くらいで書いたものを一から書き直したものです。

書き直したといっても、大筋も展開もなにも変わっていないので、変化があるといえば文章の構成だけなのですが、それでもある程度マシになったのでしょう。分量は多くなったので短編としては間違ってる気がしないでもないですが。

理系の人からしてみるとなにこれって思われそうですけど、それは大目に見て貰うということ。

それでは、ここまでありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6232t/>

---

今、そこにある不死

2011年5月29日02時40分発行